



【事例 9】 南房総市 : 池中環境保全協議会

1. 組織の概要

協定締結年度	協定面積(ha)	構成員	集落数
平成19年度	49.1ha (田:38.3ha、畑:10.8ha)	農業者102名、 12団体、1個人	2

2. 地区の概要

当地区は池之内地区と中地区の2集落からなり、館山市との市境近くに位置する平坦な水田農業地帯です。

里山や自然の様相を呈するため池(中堰)、鎮守の森など、日本の農村のたたずまいを今に残しており、その風景に憧れて都会から移住する人も多く、過疎化の進む農村では珍しく、世帯数が増加している地域です。また、当地区は南房総でも寒暖の差が大きいことも特徴の一つとなっています。



集落の景観

3. 合意形成の経緯と組織の運営(経緯と運営の工夫等)

池之内地区、中地区は安房中央ダムからの水系が同じであることから、県営ほ場整備事業を行った時のまま、2集落で組織を立ち上げることとなりました。立ち上げについては農業者が中心となり、それを一般市民が応援するという形でした。

当初は事業趣旨が良く分からず、反対意見もありましたが、行政の協力を得て組織の立上げにこぎつけることができました。



中堰



案内板

4. 特徴的な活動について

(1) 共同活動の様子について

草刈などの共同活動については、以前から集落単位で行っていたので、農業者は8割近くの方が参加しています。また、集落ごとの子ども会でも事業の開始とともにゴミ拾い等の活動を新たに始めています。

(2) 生きもの調査について

対策が始まってから、安房生物愛好会の協力を得て、生きもの調査を実施してい

ます。中堰の堤体の下にはビオトープや広場も設置されており、地元はもとより遠方からも人が訪れ、農村の自然の雰囲気存分に味わっています。



(3) 学校教育との連携

活動組織の会長が小学校の元校長先生ということもあって、三芳小学校と連携して野外学習と対策の活動内容が一致したものについては受け入れています。三芳小学校の1、2年生までは中堰までの遠足が慣例となっています。

また、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターと連携し、里山の保全活動及び子どもたちを対象とした自然体験会を実施しています。

(4) 生態系保全活動

地区の活動として、野鳥の巣箱の製作と設置、生息調査などを行っています。特に、中堰では釣り大会を開催することで、外来魚の調査を行っています。

ビオトープも、流れを作ることでホタルが生息しやすい環境を作るなど、生態系保全活動には随所に工夫が見られます。



生きもの調査

この活動には、館山市や他市町村からの参加者も多く、保護者同伴で賑わいを見せています。集落を訪れる一般市民が増えることにより、農村理解が進み、その結果としてこの対策への理解が進むことを期待しています。



巣箱の製作



釣り大会(外来魚の調査)

5. 今後の活動について

都市部からの移住者が増えてはいるものの、農業従事者の高齢化は進んでおり、農業生産はもとより、農地や山林の管理が十分に行うことができない状況になりつつあります。

この地区は、自然環境や農業環境に恵まれた地域であり、次世代へこの良好な環境を引継ぐためにも、今後は地区以外から農業ボランティアを受け入れるような体制を構築することも検討しています。

また、小学校と連携した農業体験や環境保全活動を通じて、子どもたちに地域農業や環境を守ることの大切さを知ってもらい、集落への愛情を育みつつ、将来の共同活動の担い手の育成を図ることもあわせて検討しています。

